“新娘子真漂亮吗？”の“真”は程度副詞か

李　　貞愛

0. はじめに

王還（1992）では副詞“真”についてこう述べている。動詞などの前に置かれた場合（以下“真$_1$”とする）、“单纯强调事情的真实性”（単に事態の真実性を強調する）という意味をもち、形容詞などの前に置かれた場合（以下“真$_2$”とする）、“既说明真实性也强调程度高”（真実性を表すと同時に程度がはなはだしいことを強調する）という意味をもつ[1]。“真$_2$”はその統語的特徴からすると、次のように、

i “真”＋形容詞

风**真**大啊！

ii “真”＋（情緒・態度・理解・評価・状態を表す）動詞

我**真**喜欢那个小城市。

iii “真”＋助動詞

你**真**会说话。

に用いることができ、程度修飾機能が認められ、程度副詞[2]であるとされてきた。しかし、“真$_2$”はその程度修飾という機能を失う場合がある。例えば、

1）那件衣服很漂亮。（その服はとてもきれいだ。）

2）那件衣服**真**漂亮。（その服はほんとにきれいだ。）

1)’那件衣服很漂亮吗？（その服はとてもきれいですか。）

2)’那件衣服**真**漂亮吗？（その服はほんとうにきれいですか。）

において、同じ程度副詞である“很”は疑問文に用いられてもその程度修飾機能は依然として変わらない。それに対し、“真$_2$”は2）と2)’とで違った振る舞いをする。2)’は例えば次のような場面で生起する。

A：我昨天在高岛屋看到一件衣服，很漂亮。你穿了一定很合适。

（昨日高島屋でとてもきれいなお洋服を見つけたんだけど、あなたにきっと似合うと思うよ。）

B：是吗？那件衣服**真**漂亮吗？

（そう？そのお洋服、ほんとうにきれいなの？）

この場合、“真$_2$”は“漂亮”の程度を強めているのではなく、“那件衣服漂亮”という事柄（命題）の真偽を表すものである。つまり“真$_1$”の意味になるのである。形容詞を修飾しているにもかかわらず、程度修飾の機能を失うということは“真$_2$”が程度副詞として定着していないことを物語っている。では、“真$_2$”が程度修飾機能をもつにはどういった環境条件が必要なのか、そしてその程度修飾の特徴はどのようなものか、また“真$_1$”と“真$_2$”には意味上のつながりがあるのか、“真”の語用論的特徴はどういったものか、本稿はこれらの問題について考察するものである。

1. 非程度修飾の“真$_1$”

1.1 否定的前提

3）哎，我那个倡议你考虑得怎么样？

你还**真**要这样啊！我还以为你是说着玩呢。（浮）

（ねえ、わたしの提案についてどう思っている？）

（本当にそうするつもりなの。冗談を言っているのかと思っていたわ。）

4）晴儿！那天撞到你，我还以为你是个宫女，**真**没想到，你是一个货真价实的格格。（還）

（晴ちゃん、あの日ぶつかったときは宮仕えの子だと思ったけど、本物の皇女だったのね。ほんとうに思ってもみなかったよ。）

5）可恶！是哪个太监打的板子？明知道这是打“格格”，也**真**下手狠打吗？（還）

（憎らしい！どいつがやったことだ。皇女だとわかっているのに、ほんとうに心を鬼にして折檻したのか。）

6）我也觉得巧。刚才我路过这里时就想，没准能碰上你，结果**真**碰见了你。（給）

（私もタイミングがよかったと思います。実はさっきあそこを通りかかったときに、ひょっとしたら会えるかもしれないと思っていたら、ほんとうに出くわすとはね。）

上記例文における“真”はそれぞれ「あなたはそうするつもりである」「晴ちゃんは本物の皇女である」「宦官が心を鬼にして皇女を折檻した」「あなたに出くわした」という（客観的）事実に対する話し手の認定的な意味で用いられている。そして上の四つの例文をよくみると、共に話し手が否定的前提を有していることに気づく。具体的に言うと、3）は話し手が「相手は冗談を言っているだけで、本当にそうするつもりがない」と思っていたが、現実は違っていたと感じた時に発した文である。4）は話し手が「晴ちゃんは宮仕えの子である」と思っていたが、実は本物の皇女だったとわかった時の発話である。5）は、「宦官が心を鬼にして皇女を折檻するはずがない」と話し手（皇帝）は思っていたが、事実によって覆されたときの発話である。そして6）は、話し手が「あなたに会えるかもしれない」（ということは会えない可能性もある）と心の中で想定はしていたものの、まさかそれが現実になったとは、といったときに発した文である。このように“真”が事実認定の意味をもつためには否定的な前提の存在が条件となる。従って下記例文の場合、“真”は形容詞の前に置かれても程度修飾ではなく、事実認定の意味が優先される。

7）杜梅：我老这么闹，你不烦我吧？

方言：吵的时候有点烦，但吵完就完了，不是**真**烦。（過）

杜梅：（けんかばかりしているけど、わたしのこと、嫌いになってないでしょうね。）

方言：（けんかする時はちょっといやだけど、けんかが終われば終わりでほんとうに嫌いになったわけではない。）

8）杜梅：我知道了。我很高兴。

方言：你不必为我解脱。

杜梅：不是为你解脱，而是我**真**高兴，就对你这么说了。（過）

杜梅：（わかったわ。とてもうれしいわ。）

方言：(俺の責任逃れをさせてくれなくても。)

杜梅：(別に責任逃れをさせてあげているんじゃない。ほんとうにうれしいから、そう言ってるだけ。)

7) において、杜梅は「自分はたぶん嫌われているだろう」と思っていたが、方言は「そうではない」と覆している。つまり杜梅の想定が方言に覆されたのである。8) も同じことが言える。杜梅の「わたしはとてもうれしい」という発話を方言は「ほんとうはうれしくない」と判断するが、これは杜梅の「本当にうれしい」という発話に覆されたのである。

しかし、

9) 新娘子**真**漂亮。(花嫁はほんとうにきれいだ。)

はこの文だけでは“真”が事実認定なのか、それとも程度修飾なのかを判定することができない。もし10) のように、話し手が「その花嫁はきれいなはずがない」と想定していたが、実際に花嫁の写真を見たら「きれいな花嫁だった」場合なら事実認定の意味、つまり“真$_1$”の意味になる。

10) 大家都说新娘子漂亮得像个仙女，我却不相信。可是当我看了照片以后，我不得不承认新娘子**真**漂亮。

(花嫁はまるで仙女のようにきれいだと皆言っているけど、私は信じていなかった。けど写真を見せられたら私は認めざるを得なかった。花嫁はほんとうにきれいだった。)

そして例文11) のように、話し手に否定的前提がなく、命題に対する真偽判断を必要としない場合は程度修飾として機能することになる。

11) (甲と乙が友達の結婚式に出席し)

甲：新娘子**真**漂亮啊。(花嫁はほんとにきれいだね。)

乙：是啊。(そうね。)

1.2“真$_2$”が“真$_1$”の意味に解釈される場合——文法形式の制約

張誼生 (2000) によると、中国語の副詞はその多くが“实词”つまり名詞、動詞、形容詞から転じてきている[3)]。とすると、“真$_1$”のこういった事実認定の意味も形容詞としての“真”の意味 (真実だ、うそではない) がある程度保

たれているためと言ってよいだろう。では、“真$_2$”が形容詞など属性や状態を表す語句の前に置かれても程度修飾より、このような意味が優先される文法形式を見てみよう。

1.2.1 “真$_2$”が諾否疑問文と共起する場合

12) 你**真**想认我当姐姐？

真的。我一见你，怎么说呢，就觉得你象我姐姐。(動)

(ほんとうに私を姉にしたいの？)

(ほんとうです。最初会ったときから，何と言えばいいでしょう。とにかくお姉ちゃんだと思えたのです。)

13) 你**真**敢离吗？你要真想离，那咱们就离。(過)

(ほんとうに別れられるの？お前がほんとうに別れたいのなら、そうしよう。)

“真$_2$”は例文12) 13) のようによく諾否疑問文と共起することがある。諾否疑問文を用いる時、話し手は言表事態に対してある程度の疑いや否定的前提をもっていると考えられる。例えば、“你是学生吗？”(あなたは学生ですか。)という文を発する時、次の二つの場合が考えられる。一つは、話し手は聞き手が学生である事実に対してある程度予想はもっているが断定できない場合、もう一つは、聞き手が学生である事実に対して不信感を抱いている場合である。さらに諾否疑問文は対象となる事柄つまり命題全体の真偽を問うものである。例文12) 13) について言えば、話し手は、12) の場合は聞き手が自分を姉にしたいことに対して、13) の場合は聞き手が自分と別れられることに対して疑っているか断定できないために、その真偽を聞き手に問うのである。従って“真”は“想”“敢”の前に用いられても事実認定の意味が優先される。

1.2.2 “真$_2$”が蓋然性の副詞と共起する場合

14) 他<u>大概</u>**真**累了。这次他没再吵，乖乖地闭眼沉入梦乡。(老公)

(彼はおそらくほんとうに疲れただろう。もう何も言わずおとなしく眠りに入った。)

15) 骆驼我是见过了，那肥大的驼蹄也许**真**好吃。但我无口福。(酒)

(駱駝は見たことがある。そのがっしりした大きいひづめはひょっとしたらほんとうにうまいのかも知れない。けれど私はごちそうの運には恵まれていない人だ。)

16) 老李当时就哭了。老李什么时候哭过？你当像你似的，动不动就抹眼泪。男儿有泪不轻弹，只是未到伤心处，老李当时肯定是**真**伤心了。(亮)
(李さんはその場で泣き出したぞ。彼、泣いたことあるか？彼はあなたみたいになにかあるとすぐ泣いちゃうような人じゃない。男はそう簡単に涙を見せるものではないとよく言うけど、それはほんとうに悔しくないからだよ。李さんはあの時、きっとほんとうに悔しかったのだろう。)

“肯定”のような蓋然性の高い副詞にしても、“大概”“也许”のような蓋然性の低い副詞にしても、それらによって導き出された命題――14)の場合「彼は疲れた」、15)の場合「駱駝のひづめがおいしい」、16)の場合「李さんは悔しかった」は確信度の度合いに差があるものの、あくまでも話し手の推論によるものに過ぎない。言い換えれば、対象となる事態――“他累了”、“那肥大的驼蹄好吃”、“老李伤心了”は話し手の想定する世界でのみ成立し、これらは話し手自らが経験したことでもないし、そのような事態が実際成立したかどうかも、誰かに情報を提供してもらわない限り判断を下すことが難しい。従って、“真$_2$”はやはり事実認定の意味が優先される。

1.2.3 “真$_2$”が仮定条件を表す表現と共起する場合

17) 你要**真**想离那咱们就离，真拽着去又不去了．老拿这威胁人你不怕伤感情么？(過)
(お前が本当に別れたいと言うなら別れよう。いざ離婚届けを出しに行こうとすると嫌がるくせに。しょっちゅう離婚で脅かして、お互いの気持ちを傷つけてもいいの？)

18) 皇阿玛，如果你**真**要保护我，让我回到民间算了。(還)
(お父様、もしほんとうに私を守りたいのなら、庶民の世界に戻してください。)

19) 杜小双：问题是我和孩子都不是他所爱的。

卢友文：小双，你说这话有良心吗 ？

杜小双：不要碰我。如果你**真**爱我，表现给我看。(在)

杜小双：(肝心なのは、彼がわたしと子供を愛していないこと。)

櫨友文：(小双、そんなひどいこと言っていいのか ？)

杜小双：(触らないで。もし私のことをほんとうに愛しているなら、行動で示して。)

呂叔湘（1990）では、“假设”について“和已知的事实相反”と述べている[4]。例文 17）18）19）において、文の前節“你要真想离”“皇阿玛，如果你真要保护我”“如果你真爱我”はみな反事実的、もっと正確に言えば少なくとも話し手が想定している事実に反する仮定を述べている。具体的に言うと、話し手が思っている事実は17）においては「お前は俺と別れたくない」、18）においては「お父様は私を守ろうとしない」、そして19）においては「あなたは私のことを愛していない」である。このように仮定条件を表す表現を用いる時、話し手が否定的前提をもっているため、“真$_2$”は真偽判断による事実認定の意味として解釈される。

2. “真$_2$”の程度修飾

ここまで見たところ、“真$_2$”が程度修飾機能を果たすためには、話し手に否定的前提がないことが要求され、またそのような言語環境が必要であることがわかった。では、こういった言語環境に置かれた場合、“真$_2$”はその程度修飾においてどのような特徴があるのだろうか。

2.1 必要条件——話し手の直接体験

20）（P と Q が映画を見てから）

P：这部电影**真**有意思。(今の映画はほんとに面白かった。)

Q：是啊。(そうね。)

20）の“真”は程度修飾として解釈されるが、程度の限定は他の程度副詞と異なる。例えば、“很，非常，相当”などは次の文、

21）听说这部电影｛很／非常／相当｝有意思。

(聞くところによると、その映画は｛とても／非常に／相当｝面白いそうだ。)

が成立するため、必ずしも話し手の直接体験を必要としない特徴を備えていると言えよう。しかし、

＊21)' 听说那部电影**真**有意思。

は容認できない。“真$_2$”は話し手と切り離されて存在する対象がもつ事柄的側面―客観的な観点を表すことができない[5]。“真$_2$”が程度修飾の機能を果たすには、下記例文のように、話し手の直接体験が必要であり、限定する属性あるいは状態は話し手が発話時において認定したものでなければならない。感嘆文によく用いられるわけもここにあると思われる。

22) 人家说自杀的办法有一百种，其中一种就是和作家结婚。
是吗？你说的**真**逗。(頑)
(自殺の方法は百ぐらいあって、その中の一つは作家と結婚することだって。)
(そう？ほんとにおもしろいこと言うのね。)

23) 女同事用匙儿在饭盒里拔来拔去拣了块肉放进嘴里，只咬了一口便吐了回去――吐进饭盒，伸出舌头："**真**难吃。.....“(我)
(彼女はスプーンで弁当の中をかきわけ、肉を一つ掬って口に入れた。が、すぐ口から出してしまった――その肉を弁当箱に吐き出してから舌を出して言った。「ほんとにまずいね。・・・・・」

24) (老太太的笑声格外响亮。)
你妈精神**真**好。(頑)
(お婆さんの笑い声は格別に大きかった。)
(お母さん、ほんとに元気だね。)

22) で話し手は相手の話を聞いて「おもしろい」と思い、23) で女同僚はその肉を実際食べてから「おいしくない」とわかり、24) で話し手はお婆さんに会い、お婆さんの笑い声が聞こえたので「元気である」と発話したのである。つまり話し手は自らの体験によって“逗”“难吃”“好”という属性や状態を認

定し、“真$_2$”を用いて修飾することができたのである。

2.2“我真漂亮！”はどんな場合でも言えないのか——程度修飾と人称

主語が第一人称である場合、その属性あるいは状態が話し手の直接体験によって認定できるなら使用が可能になる。つまり“我真漂亮！”のような文は如何なる場面においても使用できない文ではないということである。

25）有时他竟喜滋滋地在心里说：“我**真**聪明。像个大人一样懂得很多高深的道理。”（老）

（ある時、彼は喜びのあまり心の中でこう呟いた。「ぼくはほんとに頭がいいんだ。大人みたいに深い道理をたくさん知ってるんだから。」

26）“决定了！今天我一定要好好学习！”能说出这样的豪言壮语，连他自己都感到意外。“我**真**伟大啊！”他想到。（美）

（「よし。今日はしっかり勉強するぞ。」なぜこんなにも気概に満ちた言葉を言い出せたか、彼自身も意外だった。「僕はほんとに偉い。」と彼は思った。）

27）游上岸来，黑子问李铁：“你看有多远？还真累。”“大概50米吧。”李铁抬眼望了一下。黑子显得十分高兴。“啊，有这么远。我**真**了不起！”（体）

（陸地に上った黒子は李鉄に聞いた。「どのぐらいあると思う？けっこうきつかったなあ。」「50メートルぐらいかな。」李鉄はちらっと見て答えた。これを聞いた黒子は「えっ。そんなにあるの。俺ってほんとにすごいなあ。」と嬉しそうに言った。）

28）“我**真**善良。”他对自己说。“我，一介平民，居然可怜起一个这种地位的人家了。”（紅）

（「俺はほんとにやさしいやつだ。」彼はこう呟いた。「一介の庶民の俺が、こんな地位にある人に同情するとは。」）

25）の“我**真**聪明。”は話し手が大人のように深い道理をたくさん知っている自分に気づいたときの発話であり、26）の“我**真**伟大啊！”は「今日しっかり勉強する」と言い出した自分に対する評価である。そして27）の“我**真**了不起！”は、話し手の黒子が50メートルも泳いだとわかったときに発話されたも

のであり、28）の“我**真**善良。”は平民でありながら自分より地位の高い人に同情する自分に気づいた時の自分に対する評価である。この四つの文はいずれも話し手自身に対する評価であり、しかもプラス評価である。こういった文は上記例文の網掛けの部分からもわかるように話し手の独り言にはふさわしいが、情報として聞き手に提供するような場面ではあまり使用されない。それは自分自身のことについての評価がプラスである場合、それを意識的に聞き手に伝えるのは「自慢」に聞こえ、聞き手に不快感を与えるからである。また

29）认识你我**真**高兴。

（あなたと知りあってほんとにうれしいです。）

30）你没见到他，我**真**为你难过。

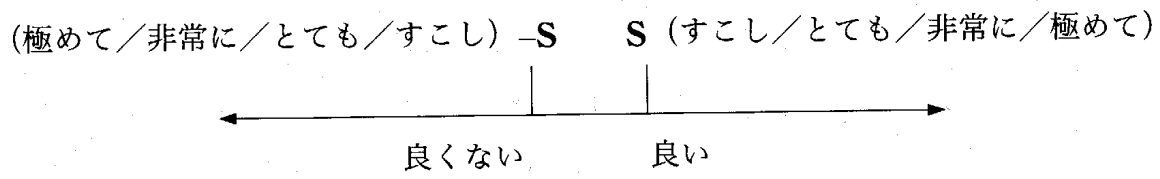
（あなたが彼に会えなかったことを私はほんとに悲しく思っています。）

に現れた“高兴”“难过”などのような、人間の感情や心理を表すものは、当人にしか認定できないため、主語は第一人称しかとらない。

2.3“真$_2$”の程度限定

“真$_2$”は程度がはなはだしいことを表すとされているが、他の程度副詞と同一視できないところがある。例えば“有些／很／太／非常／极”などは程度の限定において相対的な位置付けができる。つまり言語主体である「私」は、自ら設定した基準と現実との差、常識としての「普通の程度」と現実との差で、属性あるいは状態に対して程度を限定することができる。「良い」を例にたとえて言うと、図1に示すように、Sは言語主体が感じ取る「良さ」で右に行くほどその程度がだんだんと高くなっていく。–SからSまでは「良くも悪くもない」区間である。そして–Sは言語主体が感じ取る「良くなさ」で、左側に行くほど程度が深まっていくのである。

（図1）



つまり現実の事象の“好”の程度が話し手の設定した基準Sを超えた場合には“很”、一般常識としての普通の程度を超えた場合には“非常”、話し手が思っている適度を超えた場合には“太”、極端に近づいた場合には“极”、がそれぞれ選ばれて使用される。そして設定基準は言語主体の違いによって異なる。学生が自分の先生に向かって“老师，您说得很好。”という発話をしないのは、先生の話が良いか良くないかの基準を学生が設けること自体が不敬な行為だからである。逆に先生が学生に対して評価の基準を設けるのはあたりまえなことであるため、“你说得很好，继续努力。”は非の打ちようがない自然な発話文になるのである。

しかし、“真$_2$”は上述の副詞ほど属性や状態の度合いを具体化するものとは言いがたい。

31）他对你｛很／非常／极｝好。

（彼はあなたに対して｛とても／非常に／極めて｝親切だ。）はいずれも

32）他对你**真**好。（彼はあなたに対してほんとに親切だ。）

に置き換えられる。ということは、逆の場合“真$_2$”が“很／极／非常”のどれに当てはまるかあるいは近いか不明であることを意味している。

2.4 否定の場合—命題に対する否定への転化

他の程度副詞はそれらの前に否定の“不是”が来てもその意味と機能は変わらないが、“真$_2$”は変化が生じる。

33）a 她不是｛很／非常／极｝漂亮，但是也有吸引人的地方。

（彼女は｛とても／非常に／極めて｝きれいとは言えないが、人を引き付けるようなところがある。）

b 原来是化妆化的。那她不是**真**漂亮。

（なあんだ。メイクしているのか。じゃ彼女は本当の意味でのきれいではない。）

34）a 我不是｛很／非常／极｝想去，但是去看看也不错啊。

（わたしは｛とても／非常に／極めて｝行きたいのではない。けど、行ってみてもいいかなって。）

b 我不是**真**想去，只是没办法，不得不去。

（わたしは本当に行きたいのではない。仕方がないから行くのだ。）

33) a 34) a は“漂亮”“想”という属性や状態に対する否定ではない。つまり“漂亮”“想”に程度の差はあるものの、そのような属性や状態が存在していることに対しては肯定的である。これに対し、“真”に入れ替えた33) b 34) b は程度に対する否定ではなく、“她漂亮”“我想去”を事実として認めないことを表す。つまり33) b 34) b の“真”の意味は“真$_1$”である。前にも述べたように、程度を強める“真$_2$”は話し手の直接体験による、属性や状態に対する（話者側からの）認定である。しかし“不是～”は命題つまり客観的事実に対する否定であるため、両者は矛盾になるのである。

2.5 他の程度副詞との連用

35) 她坐着的样子，说话的样子，移动的样子，都让我着迷。我总想能有个机会对她说：“你**真**太美了。”（大）

（私は彼女の座り方、話し方、歩き方に惹かれていた。そして機会があれば彼女にこう伝えたかった。「あなたは最高にきれいです。」と。）

36) 你比我聪明，比我坚强。苏珊，你吸引着我，就像火吸引着一个受了冻的人那样。你**真**非常体贴，非常稳健，非常通情达理。（天）

（あなたは私より頭がいいし、意志も強い。スーザン、私はあなたに惹かれています。まるで寒さに凍えている人が火に引きつけられるように。あなたはほんとにとても思いやりがあって、落ち着いているし、人情と道理をちゃんとわきまえている女性です。）

37) 罗莲说：“你**真**很厉害。去年一上化学课就哭，倒叫高克老师给你道歉。什么意思？结果三个理科老师都吓得团团转。”（人）

（羅蓮は言った。「あなたってほんとにすごい。去年は化学の授業に出ると決まって泣いていた。それに、高克先生に謝れと騒いだりして。どういうつもりだったの？結局それで三人の理科の先生がびっくりしていろいろ大変だったんだから。」）

38) 有的家长为此忧心忡忡。他们说：“我们只盼望孩子能在这里学点真本事。

現在一看办学条件这么差，真有些不放心。”（中国教育和科研計算機網 2001. 10. 11）

（一部の保護者たちは心配で気が気でなかった。彼らはこう言った。「私たちはただ、子供たちがここで本当の技能を学べたら、と望んでいるだけです。今の学校の運営がこんなに悪いんじゃ、ほんとに心配ですね。」

“真$_2$”は他の程度副詞と共起するとき、いつもそれらの前に来る。つまり、属性や状態を表す語に一番近いのは事柄的側面を表すことのできる他の程度副詞である。“真$_2$”は話し手の判断を担うため、認定的意味合いが強くなってくる。

2.6 程度の高低より属性の「真」に対する強調

39）我这个当姐姐的真糟糕，我什么礼物都没给她带来。（情）

（私はほんとにいけない姉だわ。妹に何のプレゼントも用意してこないなんて。）

40）你真够意思！知道我淋了雨，把这玩意儿都拿出来了。（情）

（お前はほんとにいいやつだ。俺がびしょびしょに濡れたと知って、こんなものまで出してくれたんだね。）

41）哎，杜飞，你可真没用。追了大半天如萍跟别人订婚了。（情）

（ねえ、杜飛、もうほんとに役に立たないんだから。あんなに一生懸命追いかけても如頻は結局他の人と婚約してしまったよ。）

42）有时真恨自己生在公候之家，弄得身不由己。（還）

（時には公爵の家に生まれ育ったことがほんとに悔しい。自分の思うどおりにならないから。）

“真$_2$”は話し手が眼前の結果状態（網掛け部分）によって自ら認定した属性あるいは状態（下線部）がたった一つであることを強調する。そしてこの「強調」は、程度の高低というスケールの中で「高」に近づいているように感じられる。われわれが普段面と向かって相手に謝罪するときに“真対不起”をよく使い、“很对不起”があまり選ばれないのは、“真”をもって相手に申し訳ないことをしたのを自ら認め、さらにその謝罪の気持ちは嘘ではなく、（唯一の）

真であることを相手に訴えたいからである。

3.“真$_1$”は事実の「真」に対する強調

上述のように、“真$_2$”は話し手に否定的前提が存在しない場合に用いられると、認定した属性あるいは状態の唯一無二を強調するといった発話・伝達モダリティをもつ。逆に話し手に否定的前提がある場合に用いられると、意味的には“真$_1$”として解釈される。“真$_1$”は客観的事実に対する認定であるため、命題内容に対して肯定的であり、伝達においては、聞き手に「真」の情報を提供するといった語用論的機能をもつ。“真$_1$”はよく“真的”という形で使われる。

3.1“真的”

“真的”は事実認定の“真”に断定の語気を表す“的”が加えられたため、言表事態の真に対する話し手の強い断言の態度を示す。そして伝達においては、聞き手にもその事実を認定させようとする話し手の心理が伺える。逆に疑問文に用いられるときは話し手の強い不信と意外を表すことになる。

43) 我**真的**不想玩。你们要人不齐，我可以凑一手。人多就算了。(頑)
(俺は本当に気が進まない。もし人が揃わなかったら入ってもいいけど、足りているのなら勘弁して。)

44) 希望你别觉得我假惺惺的。我**真的**愿意你——怎么说呢？一个字:好。(過)
(親切ごかしではないと思ってほしい。私は本当に、何と言えばいいかな。君が元気でいることを望んでいる。)

45) 难道你没有收到？
没有收到。我**真的**没有收到。如果我收到了，我不会不理她的。(情)
(まさか受け取っていないことはないでしょうね。)
(受け取っていません。本当に受け取っていません。もしその手紙を読むことができたら、私は彼女を無視するはずがありません。)

上の例文からもわかるように、話し手は“真的”を用いて“我不想玩”“我愿意你好”“我没有收到”を確かな情報として聞き手に提供し、聞き手にもその事実を認識させようとしている。

3.2 “真是（的）”

“真是”は事実認定の“真”に肯定を表す“是”が組み合わされ、話し手の「不満や申し訳ない気持ちを表す」とされている[6)]。

46）**真是**，你这样做太不应该了。（八）

（まったくもう。あなたのこういうやり方はとてもまずいですよ。）

“真是”はよく後ろに断定の“的”をつけて“真是的”という形で使用される。

47）哎，你也**真是的**，多麻烦。（無）

（まったくもう。どんなに面倒くさいか。）

48）你这孩子也**真是的**，到那边为什么不先说一声，让大家为你着急。（情）

（この子ったらもう。あちらに行くのならなぜ言わないの？みんなを心配させて。）

49）书桓，你也**真是的**。你要做什么也得先跟我说一声。（情）

（書桓ったらもう。何かする前にまず私に相談しなきゃ。）

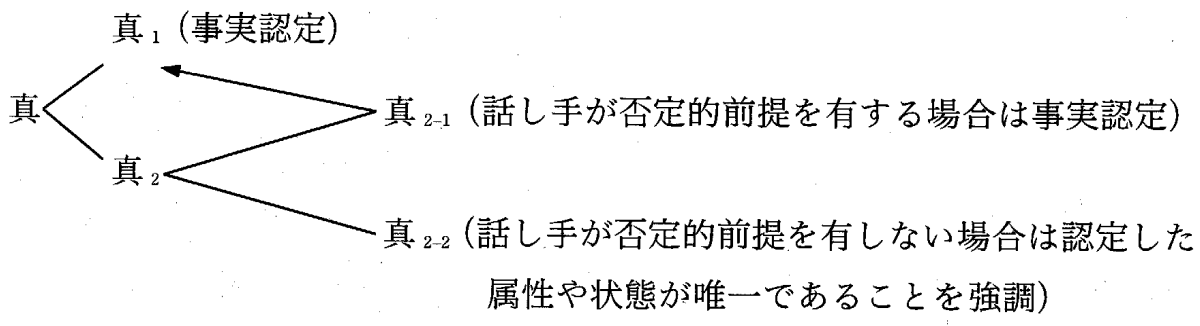
50）**真是的**，不该来的来了，不该走的又走了。（情）

（まったく。来てほしくない人は来るし、帰ってほしくない人は帰っちまうし。）

上の例文からもわかるように、話し手の「不満」は後続の文脈で表されている。“真是（的）”はただ話し手の不満の態度を強めるだけである。

4. “真$_2$”は程度副詞か

これまで述べてきた内容を簡単にまとめると以下の通りである。



こうしてみると、副詞“真”は事実認定が本来の意味である。形容詞などを修飾しているときも話し手に否定的前提があればこの意味が優先される。しかし事実に対する認定が必要ではない環境においてかつ属性や状態を表す語を修飾した場合は、その属性や状態が唯一であることを強調する意味をもつ。属性や状態を強めるという点からすれば、“真$_2$”は他の程度副詞と共通している。しかし、他の程度副詞は客観的で、事柄的であるのに対し、“真$_2$”は主観的で、モダリティ性をもったものである。もし「認定した属性や状態に対する強調」が事実認定の意味からの脱却であるならば、命題に対する話し手の主観的な評価という側面は無視できない[7]。張誼生（2000）が“真”を“评注性副词”(評価性副詞)[8]に帰属させたのもこの理由によるものではないかと思われる。

注

1)　王還（1992）p 372 参照

2)　劉月華（1983）、朱徳熙（1982）、王力（1933）では“真”を程度副詞としている。趙元任（1968）では“真”を“必要性副词”兼“程度副词”であるとしている。

3)　張誼生（2000）p 346 参照

4)　呂叔湘（1990）p 407 参照

5)　楊達（1994）では、“很”と“真”のモダリティについて以下の如く述べている。“很”は話し手自身からの見方を排除した、普遍的で、社会一般もしくは周囲の見方を取り入れた客観的なモダリティを表し、“真”は反対に、普遍的で、社会一般もしくは周囲の見方を排除した、話し手自身の立場からの主観的なモダリティを表す。とすると、“很”は事柄的であるとも言える。

6)　呂叔湘（1980）p 668 参照

7)　“真”は命題に対する話し手の評価であるため、“真漂亮的衣服”は“真$_1$”も“真$_2$”も成立しない。

8)　張誼生（2000）では、「対象となる命題全体あるいは述部に対する主観的評

価やコメント」を“评注性副词”の機能としている。

＜参考文献＞

楊達（1994）　「“很”“真”についての構造研究—そのモダリティを通して」『成城文芸』No148

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店

刘月华等（1983）《实用现代汉语法》北京语言学院出版社

朱德熙（1982）《语法讲义》第一卷 1999 年版　商务印书馆

赵元任（1968）《中国话的文法》1980 年版　香港中文大学出版社

张谊生（2000）《现代汉语副词研究》　学林出版社

王力（1933）《中国现代语法》1985 年版　商务印书馆

吕叔湘（1980）《现代汉语八百词》　商务印书馆

吕叔湘（1990）《吕叔湘文集第一卷中国文法要略》　商务印书馆

王还主编（1992）《汉英虚词词典》　华语教学出版社

＜用例出典＞

過　王朔　《过把瘾就死》

頑　王朔　《顽主》

動　王朔　《动物凶猛》

浮　王朔　《浮出海面》

我　王朔　《我是狼》

無　王朔　《无人喝采》

給　王朔　《给我顶住》

還　琼瑶　《还珠格格》

在　琼瑶　《在水一方》

老公　董妮　《老公接招》

亮　都梁　《亮剑》

老　刘升文秦新成《老子传》

美　郎打浪　《美丽人生》

人　亦舒　《人淡如菊》

酒　莫言　《酒神》

天　德莱塞　《天才》

紅　司汤达　《红与黑》

大　陆天明　《大雪无痕》

情　电视剧　《情深深雨蒙蒙》

体　体坛周报 2001.9.3

中国教育和科研计算机网 2001.10.11

なお、出典を示していないものはすべて筆者の作例である。

（り　ていあい・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）